さざなみ国語教室
第464号　2020年11月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
TEL 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

座右の「迷

中村　信次

教職三十八年の終盤は「指導的」な立場を拝命し、講話する機会も少なからずあった。自分のこれまでを顧みても気恥ずかしいことを口にしてきたようにも思う。さらには、「良いお話」だったと拝聴したことも、一週間も経てば話の核心をも忘れている自覚が気持ちを萎えさせる。

ただ、ネタ帳にもなった一冊のノートには著名な方、作者不詳の一文を、メモ、切り抜きで貯めてきたことは自分の生き方の道標にはなっている。三十分の聴講も、六十分の読書も、残るのは一文の私である。これを一般には「座右の銘」と言うのだろうが、ここでは私の二つの「座右の迷」を紹介したい。

白は白　黄は黄のままに　野の小菊　取りかえられぬ尊さを咲く
（田中木叉

好き勝手に生きたいわけではないが、余りにも調和を求める毎日を自分にも周りにも求めたくはないものだ。自分らしく日々を送る中で、元気に居ることが周りの安心感を生むと、夫婦、家族生活の積み重ねから思う。「自分の大切さと同じように他の人の大切さを認める」ことは人権教育の目指すところである。その人らしさを、その良さとして素直に受け止められるような自分でいたいものだ。

「選択」とは「他方を捨てる」ことと同義である　作者不詳

なかなか決められない、捨てることのできない自分を強く感じるので思わず書き留めた言葉である。「選択」を迫られる場面は日常の中で幾つもある。進学、結婚、就職、節目節目ほどに大きな選択が必要である。最近では家を建てるときに私なりの大きな選択があった。

他方を捨てる覚悟のない「選択」は後悔が付きまとい、迷いとなって明日の自分を苦しめる。「選択」には良いものを選ぶ語感が滲み出るが、良いものを選ぶという意識以上に、こちらを選ぶことはないという根拠や覚悟こそ大切だと思っている。

「働き方改革」を通して、様々な学校改革が求められたが、何を変えるかは、「何を変えてはいけないか」をともに考えなければいけないと思ってきた。この芯が決まれば、後は現場感を持って好きにしたら良かったのである。迷うものにはどちらも良さや大切さがあるから迷うわけである。

こうして、生き様に重みを感じる他人の言葉を借りて、自分の指針としている。機会があれば紹介してきた。教育実習生や初任者にもいくつかの著名先人の言葉で説いてきたが、かの有名な言葉にはどこかでまた出会ってくれるだろうと。私の話は一週間もすれば忘れられてしまうものだろうから・・・。

（滋賀県湖南市教育研究所　所長）

さざなみ

▼授業の動画を文字化して「さざなみ国語教室」例会の提案資料に添付された。かなりの手間と時間をかけた記録であった。提案は若い西條陽之先生（小野小）教材は「すがたを変える大豆（光村・３年）▼授業は「すがたをかえる大豆」（３年・光村）の内容精査の段階。発言記録読む過程で自分の理解と他の子と違うことを伝えようとした子に注目した。「みんなと違うのは、中が③段落から⑥段落目なんですけど。なんでかというと、これは全部、調理されているというか、作っているものなんだな。そして、⑦段落と⑧段落はそのまま、塩とかつけて食べるものやから（後略）」発言は続き、作り方や工夫を文を根拠にし段落の働きや違いについてであった。文章の叙述をもとに、段落の関係や大豆の工夫について説明した文章量の多少を比べ具体的な豆腐」の例のについてであった。▼その子の発言の長さや、内容に興味を持ち、発表を想像して音読をした。内容だけでなく時間も知りたくなり、再度音読をした。約２分。正確には１分４８秒。三回程読み返し、ようやく、発言が整理できた▼発言を聞いているだけでは見逃してしまいそうなことや、文字を見ているだけでは、発言者の真意が伝わらないであろうと思った発言の記録。授業における発言の生かし方についてしばらく考えた。（吉永幸司）

さざなみ国語教室のホームページ　http://www.eonet.ne.jp/~sazanamikokugo
NPO 法人 現代の教育問題研究所のホームページ　http://kokugo-npo.com/index.html　ご覧ください。

宮沢賢治が幻灯を通して伝えたいこととは

北川　雅士

１０月の中旬から「やまなし」（光村図書六年）の学習に入った。5年生から「大造じいさんとガン」で情景描写について、「わらぐつの中の神様」で物語の特色について学習を積み上げてきた。この教材では「作者と作品の世界観をとらえる」ために、「やまなし」と「イーハトーヴの夢」を読みながら、宮沢賢治という人物が描く作品の世界を叙述から想像しながら、作品を通してどのようなことを伝えようとしているのか、考えをまとめていく学習を進めていった。

授業の前半は、物語の初発の感想をもとに、作品の世界を想像するために、言葉の意味調べや、情景の様子を想像し、宮沢賢治が考えた言葉や、独特の表現についての解釈をグループや学級で考えを深めていった。

そして学習の後半では、「やまなし」を通して宮沢賢治が伝えたいことは何かを、教科書の手引きや、題名など様々な観点から考えていった。

A児・・・賢治は人が忘れがちになってしまうものの大切さを伝えたかったと思いました。なぜかというと時代が賢治の理想と違う方向へ進んでいたからです。やまなしのかにの成長や心情を読み取ることで賢治の理想であった人に優しさを育ててもらいたいという考えにつながると思ったからです。

B児・・・賢治の人生と「やまなし」の共通点を探すと、賢治が経験した多くの災害暴れる自然は「やまなし」の中のかわせみで表現していると思います。そしてそのかわせみにおびえているかにたちを人にたとえ、農作物のめぐみはうれしい物だということを伝えたいのだと思いました。

C児・・・宮沢賢治さんは植物について考えていた人なので、題名のやまなしのように人や動物は植物を育て、食べることで行きていけるというつながりがこの「やまなし」で伝えたいことだと思いました。

D児・・・「やまなし」には賢治が伝えたい勇気や希望がつまっていることが「おいしい」「いいにおい」「おどるよう」という言葉からイメージできるので、「鉄砲だま」のような怖い存在よりも勇気や希望を大切にしたいと考え「やまなし」の題名にしたのではないかと思います。

作者について学び、物語の世界観と結びつけるという学習ははじめての経験であったが、教科書の資料に加え、並行読書の図書室の宮沢賢治作品に書かれた考察や、コラム、作品分析を読んでいくうちにどんどん宮沢賢治の世界に引き込まれていった。また言語活動に入る前から、「風の又三郎では・・・」「注文の多い料理店では・・・」など関連づけて考えている児童もいた。このあと並行読書をした宮沢賢治の作品をどのように読んでいくのかいまから楽しみである。

（彦根市立城南小学校）

教室づくり

西條　陽之

コロナ禍の今、学習のスタイルが制約を受ける中でも、目指すべき子どもたちの最終的なゴールは「教師の手から離れても、自ら学ぼうとする人」になることだと考える。子どもが自ら思考し、判断し、表現する、対話的な学びのために教室掲示の実践を報告する。

各教科の大切な言葉を「学びスキル」としてカードにして、壁面掲示に蓄積している。例えば、国語科の説明文の学習ならば「構成」や「はじめ・中・終わり」、算数科ならば「1000m＝1km」、「分母と分子が同じ数のとき、1になる」というように、覚えておくべきこと、これからも役に立つであろうことを残すのである。

教室掲示は学びの足跡であるとともに、学びの手がかりにもなる。特に、国語で学んだことは他教科においても生かされる場面が多々ある。教科書から読み取った知識・技能と既習の学習を照らし合わせることで、子どもたちは自ら思考し、判断することができる。学習の振り返りや新しい単元の始まりには、壁面に目を向ける子どもが増えてきた。学びスキルの導入時には、教師主導で言葉を選んでいたが、少しずつ主導権を子どもたちに移譲している。学習の途中中に「これって学びスキルだよね」と見極めたり、学習の終わりに「？について、学びスキルを書いてもいいですか」と自分の言葉で学んだことを表現したりする姿も見られてきた。学びスキルがある程度溜まってきたら、分類していく。話し合い、書くこと、読むことの中の物語文、説明文、など細分化、グルーピングを行うことで、これまでの学びの整理にもつながる。教室の主役はいつでも子どもたちである。学びの連続性に気づきつつある彼らと、これからも言葉を紡いでいきたい。

（大津市立小野小学校）

説明文とリーフレット作成

川端　由起

10月下旬から「世界にほこる和紙」の単元に入った。この単元は、「伝統工芸の良さを伝えよう」の書くこととセットであり、書く事では、リーフレット作りが設定されている。この教材の単元を貫く言語活動は、１次は、読むための目的づくりで、相手は、クラスの人に、調べた伝統工芸の良さをリーフレットにして紹介しようにした。２次は、目的に応じた教材文の読みで、ここでは、リーフレット作りのために、「世界にほこる和紙」を読み、その論理構成や書き方を学び、自分のリーフレット作成のために生かそうということになる。そして３次は、自分の言語活動の振り返りとなり、リーフレットを作成し、仕上げ、クラスの皆と読み合い、仲間同士でお互いのリーフレットの良さを認め合う、という活動になる。

ただし、４年生では、説明文を目的や必要に応じて要約しながら読めるようにするという目的がある。「世界にほこる和紙」の論理構成や筆者の言いたいことを大体おさえると、学習は要約へと移っていった。この要約に関して言うと、児童は「アップとルーズ」からこの作品で３作目になるので、要領は得ており、スムーズに学習を終えられた。問題なのは、３次のリーフレット作成であった。まず、伝統工芸を探す作業から入るが、伝統工芸が記載されている本が少なく全員が本で探すことができない。ここで草津市の小学校の良い所は、10月から児童全員にタブレットが配布されたことである。タブレットで「伝統工芸」と検索すれば、日本全国あらゆる伝統工芸が見られ、これで児童はリーフレットを簡単に書くことができるなと胸をなでおろした。

しかし、喜びも束の間、リーフレット作成の下書き文書を見ると、ネットの文章をそのまま書き写したものばかりが多かったのである。

伝統工芸という題材が難しいのか、「世界にほこる和紙」の読みが不十分なのか、どちらもなのか。もしくは他に原因があるのか。そこで、私はワークシートを作成し、リーフレットに書くことは、歴史、特徴①特徴②、自分の意見の４つを書くこととし、それぞれ枠を作り、児童に書かせたのである。そうすると、児童はすらすら書きだした。文章を見える形にしていないから児童が書けなかったのである。

要約をするときに、文章を初め中、終わりに分けて意味段落の要点をまとめて要約とすることが多い。リーフレット作りは、その反対の作業が必要で、文章にすることを枠を作ることで、映し出していく。そのことを今回の単元で知り得ることができた。今後更なる実践を積み重ねていきたい。

（草津市志津小学校）

消防隊員さんの手紙

岡嶋　大輔

今年度から、消防署の見学は三年生が行っている。

一時間の見学であったが、消防署の様子についてのプレゼン、隊員と担任との消防服の速着替え競争、各消防車の見学、隊員への質問等々、盛りだくさんの内容で、消防署の方々が楽しく分かりやすく教えてくださった。子ども達は短い間にすっかり隊員の方々と仲良くなり、帰りは別れを惜しんでバスに乗り込んでいた。

教室に戻り、お礼の手紙を書こうと投げかけた。手紙の書き方は、別の機会に既習済みであることもあってか、そう抵抗はなく、みんなは「うんうん」「書きたい」と勢い付いていた。

まずは「はじめのあいさつ」。「季節感のある言葉」を考えて出し合った。『登校の時に息をはくと白くなる時があります。』等と、子どもらしいものがたくさん出された。また、「相手の様子をたずねる言葉」「自分の様子を伝える言葉」を順に確認した。

そして「結びのあいさつ」と「後づけ」も確認した後、「本文」として「心に残ったこと」「勉強になったこと」等を少し詳しく書いていくようにした。

以下は、ある子の手紙。

『だんだんと寒くなっている今日このごろですが、お元気でいらっしゃいますか。わたしたちは、毎日元気いっぱいにすごしています。

この間は、消防しょを見学させていただきありがとうございました。

わたしは、「だれかの役に立ちたいから消防士になった。」という言葉が心にひびきました。だれかの役に立つということは、とてもすごいことだからです。わたしは、かんご士になりたいというしょう来のゆめを持っています。だからその言葉が心にひびきました。

わたしは消防しょに行って、どれだけ火事がおそろしいかを知りました。わたしは、消防たい員の人たちを見て、どんなことがあっても前向きにがんばって、毎日学校や休みの日にむずかしくても前向きにがんばって、毎日を過ごしていきたいなと思います。

消防たい員の方は、何があっても前向きにゆう気を持って消防士をやっていらっしゃるので、とても、とても消防たい員さんたちみたいな大人になれるといいなと思いました。いつでもえ顔で、いやなことがあってもいやな顔をせず明るい顔の消防たい員さんのことを、わたしは、いつでもおうえんしています。

今回、たくさんのことを教えていただきました。自分たちのことを守ってくださるたくさんの方々に感しゃしながら毎日を大切にしてすごしたいと思います。ありがとうございました。（後付け略）』

この手紙を書いたＹさんは、臨時休校後一ヶ月ほど学校に入りづらい時期があった。今はそんなことがなかったかのように笑顔で毎日を過ごしている。そんな中、今回、隊員の生き方に触れ、感化され、自分を見つめ直し、これからの生き方につなげて手紙を書いていた。人と人との出会いの大切さを感じるとともに、その相手に手紙を書くことのよさを感じた。

（野洲市立北野小学校）

教員も学びを止めない

飯沼　俊雄

今日の急激に変化する時代背景の中で、我が国の学校教育には、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている（文部科学省、2020）。従来指摘されてきた新たな課題に加え、先に述べた新しい時代に必要な資質・能力の育成に関する課題に対応することが教員によって担われる。また近年、教員の専門性について、育成すべき教員の資質・能力の中核的要素として、教員の専門性向上の社会的要因には、校内研修や校外研修などの社会的要因が挙げられる。以前担当した初任者は、同じ学年の教員や他の教員と授業について語り合う中で、自分の意見を付け加えたり、整理したり、意見を投げかけたり、ルーブリックの意見に疑問を投げかけたり、誰もが意識していたワイトボードを活用しながら、友だちの意見を可視化させ、ルーブリックを活用した後から話し合いが始まることを意識していた。そして、「ホワイトボードに書記」「発表」という役割を一人ひとりが担い、司会者を中心に交流を進めていた。教師の指示がなくても、子どもたちだけで授業を進めていた。また、「グループ学び」の話し合い活動においては、形式に当てはめた「発表会」では、自分の意見を出し合いながら、「グループ学び」の話し合い活動において、「司会」「タイムキーパー」「書記」「発表」という役割を一人ひとりが担い、司会者を務めていた。さらに、「グループ学習」の話し合い活動において、「みんなの方を向き、黒板の前に机を置いて、子どもが一日の学習計画表を見てください。」という小集団での話し合い活動において、「司会」「タイムキ

ろを交流します。」これは、以前、私が担当した初任者のクラスの子どもの発言である。担当した初任者のクラスでは、日直になった子どもが一日の学習計画表を見てください。」と言ったことに、「学ぶ」ことを可能とした。その中で、「学ぶ」ことを対象化し言語化することが見られた。子どもの発言をもとに、授業中に授業計画を修正して進めるようになってきた。たとえば、ルールを構築していく上でも、教師のルールを一方的に押し付けるのではなく、子どもたちの意見も聞きながら、合意形成する時間を大切にする初任者は、子どもの指導行動の変容があった。子どもの「対話」を繰り返す中で、子どもの発表の声が大きく、意見が多く出ている授業が展開された。

これまでの教員の専門性向上の研究動向を見ていると、「教員の専門性向上の中核的要因には、校内研修や校外研修などの社会的要因が挙げられる。以前担当した初任者は、同じ学年の教員や他の教員と授業について語り合う中で、自分の授業の中で、「授業計画や発問などを調整しながら、授業を展開していたといえよう。

教員も仲間とともに、日々、省察し学び続けることの大切さを再確認することができた。

（湖南市立三雲東小学校）

参考文献
新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会　2020
「令和の日本型学校教育」の構築～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びの実現～（中間まとめ）文部科学省　中央教育審議会　2015
これからの学校教育を担う教員に求められる資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）
佐藤・岩川・秋田　1990　教師の実践的思考様式に関する研究（1）東京大学教育学部紀要，30，177-198.

編集後記

▼十月例会（第四百六十三回）の提案は西條陽之さん（小野小）研究主題「これから目指す、考え理論するための教室づくり」研究教材は「すがたを変える大豆」「食べ物のひみつを教えます」（３年光村）▼研究提案に当たって西條さんが取り組んだことは、単元の全授業を撮影し、それを文字化し記録に残すことであった。その後、子どもや教師の発言を読み、実際の授業では見逃していること、子供同士の発言のつながりを考えること、更に、教師の発言を客観的に分析することであった。かなりの時間をかけて再現した授業記録を読み返すことで、西條さんが発見したことは、自分の話の量や子どもの発言の生かし方であった。▼授業記録に再現は、昭和時代で録音テープを聞きながら文字化するという方法で行っていた。が、映像として動画で記録が出来るようになってから、便利さに委ねて視聴するということが多かった。しかし、平成、令和時代になって、改めて、授業の文字化を通して、授業の機微にふれた提案に深く感動することが多かった。▼「すがたを変える大豆」については、文章の構成や例の書かれ方を中心として話し合いが積み上げる過程で、文章の細分に着目して、互いの理解を交流するという学習活動における指導の仕方や効果的な場の設定及び、手立てについて議論を深めた。▼巻頭には、中村信次先生より玉稿を頂きました。深謝。

（吉永幸司）